

平成二十五年度医学研究助成金・外国人留学生奨学金の授与式を開催

平成二十五年度第十八回肥後医育振興会医学研究助成金及び第十七回肥後医育振興会外国人留学生奨学金の合同授与式が、平成二十五年十月七日に熊本大学医学教育図書棟四階ゼミ室において行われ、神原武理理事長から医学研究助成金四名、外国人留学生奨学金四名に対して、各十五万円が助成者ひとり一人に手渡されました。また、それぞれの助成者の代表者から謝辞及び今後の決意が述べられました。



平成二十五年度熊大病院群卒後臨床研修プログラム研修医育成報告

熊本大学医学部附属病院総合臨床研修センター長
山下 康行

医師臨床研修制度は様々な課題がありながら十年の軌跡を有するシステムとなり、平成二十五年度は厚生労働省を通じ、研修制度に関する大きな見直しが行われた年となりました。新研修制度となつてから、表在化した研修医の都市部集中、地域や診療科における医師偏在、また研究者の減少といった問題は周知のごとくですが、その一方で医師としての一般的な診療能力を広く身につけるための制度として、社会的に認知された期間でもありました。

この間の成果について厚生労働省は大規模な実績調査や研修医、指導医のアンケートを元に、制度の評価と見直しを行つていきます。最終的に新制度の基幹である、二年間の期間とローテーションという方式、必修診療科と選択科を含む研修という現行制度の大枠を維持するという結論で、昨年度末に通達されています。

今回の見直しにより、今後この研修制度が長期間継続されることはほぼ確定的になったといえそうです。このよりどころの一つは多くの現役研修医の肯定的意見も背景となつています。マッチングシステムに基づく新制度の研修は、希望順位で選択した病院との「マッチ」により研修ができる制度です。結果的に有利な条件を持つ都市部大型病院への流れが本流となり、逆に地方大病院から遠ざか

る研修医がふえ、昨年の全国の大病院研修医採用の割合は半分以上にまで減少しました。研修病院の定員枠の総計は実際の研修医数より相当多く、全国で定員空き数は一〇〇〇名を超えています。つまり研修医サイドに選別の機会が十分にあるとはいえ、各研修病院がいかにその期待に応え得るかを示していく必要があります。

平成二十五年度の熊大病院群プログラムでは高いマッチ率を背景に一年次初期研修医四〇名を迎え、二年生五五名と合わせて九五名の研修医が研鑽をつみました。また、各診療科、病院群のご指導の元、今年も無事に二年次研修医全員の研修了が達成されました。また、熊大病院群では厚生労働省の見直し指針を踏まえたうえで、二十六年プログラムについてはさらに弾力化した構成で研修医の募集を行いました。従来わかりにくいとも言われたプログラム構成を院内ワーキンググループでの検討をもとに改訂させて頂きました。その結果、次年度プログラムについても九州内でトップのマッチ率となり、高く評価されたことも合わせてご報告しておきます。

これらの活動は財団法人肥後医育振興会をはじめとした多数の関係者の皆様ご理解・ご協力によるものであり、この場を借りて改めて感謝申し上げます。次第です。今後も医療人の育成という総合臨床研修センターの使命のもと、臨床研修を通じて県内医師の育成を行いたいと考えています。今後ともご指導、ご鞭撻の程卒よろしくお願い申し上げます。

第三十五回九州理学療法士・作業療法士合同学会

第三十五回九州理学療法士・作業療法士合同学会会長
中島喜代彦

第三十五回九州理学療法士・作業療法士合同学会を平成二十五年十一月二十三日(土)～二十四日(日)の二日間、二つの会場(市民会館崇城大学ホール、熊本国際交流会館)で、無事開催することができました。本学会のテーマを『Heart & Science』と題し、指定演題も含め三―五題の発表(口述発表九七演題、ポスター発表二一八演題)があり、活発な質疑応答がなされました。

基調講演は九州大学の岡田誠司先生による『脊髄損傷に対する細胞移植治療研究の現状と展望』、特別講演は大谷大学の鷺田清一先生による『能力とは何か?』である/できないを仕分ける前に』、教育講演Ⅰは熊本保健科学大学の野尻明子先生による『終末期のリハビリテーション』、最後までその人らしさを支えるケア』、教育講演Ⅱは関東労災病院今屋健先生による『臨床で使える膝関節リハビリテーションのコツ』、市民公開講座はテムザック代表取締役の高本陽一先生による実演も交えた『人に役立つロボット作りを目指して』というテーマで各々お話しいただきました。

閉会式にはご当地キャラクターのくまモンも参加し、くまモン体操、閉会宣言と終始大盛況の学会でした。末尾となりましたが、本学会の開催に